インドラサン登頂

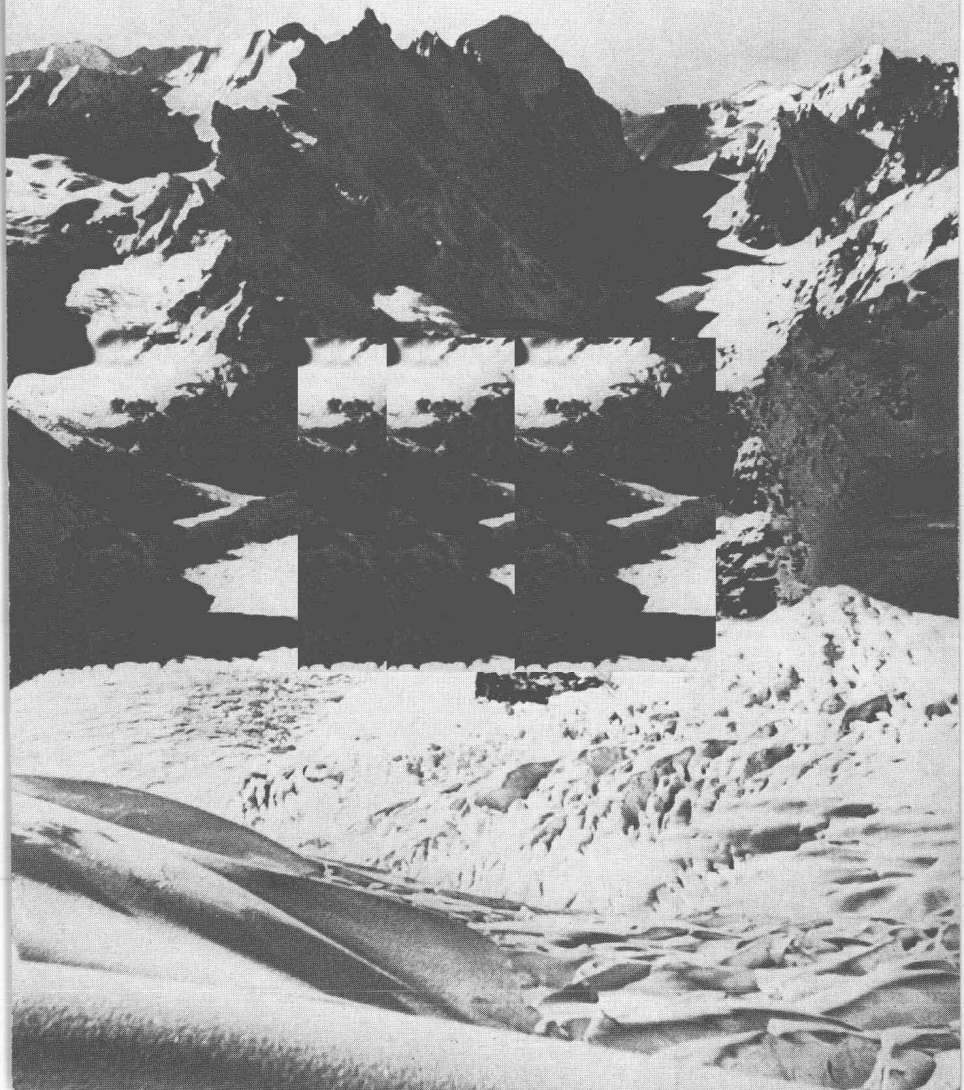
京都大学山岳部

KAWADE PAPER BACKS

河出書房

ラサン登頂

京都大学山岳部



Kawade Paperbacks 87

インドラサン登頂

昭和39年2月20日　初版印刷
昭和39年2月25日　初版発行

定価　250円

著者　京都大学山岳部
発行者　河出孝雄
印刷者　堀鉄判

発行所　東京都千代田区神田小川町3の8　株式会社　河出書房新社
電話東京（291）3721～7
振替口座　東京　10802番

©1964

落丁本・乱丁本はお取り替えします

序

京都大学山岳部は戦後早々活動を開始したが、当時は熱心な少数部員で運営され、山行きも比較的少ない状態であった。しかし、われわれは戦前の第三高等学校山岳部、京都大学旅行部の伝統をうけついで、これらに劣らない部を再建しようと努力を重ね、いまでは七十人を越える部員を擁するに至っている。

数年前から山岳部として海外遠征計画をすすめていたところ、急激に具体化し、インドのパンジャブ・ヒマラヤに遠征隊をおくり、インドラサン峰に初登頂することができたのは、まことに喜ばしい次第である。

記録の刊行にあたって、深い理解と強力な援助をたまわった在日インド大使館をはじめ、文部省、大蔵省、在インド日本大使館、その他関係各方面にたいして深甚なる謝意をあらわしたい。

一九六四年一月

京都大学山岳部長
京都大学教授　多田政忠

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

序

出発まで……七

パンジャブ・ヒマラヤへ……一九

キャラバンの準備……二

マラナ谷のベース・キャンプ……三一

マラナ氷河のアイス・フォール……四七

モンスーンの雪に降りこめられる……四九

クレバスとセラックスの中をゆく……六一
楽しいベース・キャンプ……七四
岩と氷の壁……七九
第二キャンプへ……八一
岩と氷とのたたかい……八九
氷壁にはばまれる……一一〇
ついに頂上に立つ……一三七
インドラサンをふたたび攻撃……一三九
ビバーク地からキャンプへ……一五四
デオ・ティバ……一六二
雪山よさよなら……一六九
キャンプを撤収……一七一

下山の途につく……一七八
ふたたびクルーへ……一八五
〈付〉
生物観察のメモ……一九一
マラナ村……一九九
日誌……二一一
あとがき……二二五

写真撮影・京大山岳部
表紙構成・関口正子
本文挿絵・真鍋　博

出發まで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

京都大学山岳部が海外遠征を考えてから、ずいぶん長い年月がたつ。ネパール・ヒマラヤやカラコラム、ときにはニューギニアの山々が対象としてえらばれ、文献資料を集め、案をねったことが何度かあるが、いずれの場合も、話が具体化しないうちに、いつの間にか消えてしまった。

実現を妨げた理由の最大のもの、それは、大学山岳部の宿命というべきものである。四年間の大学在籍期間というワクの中では、日本の山を立派に登ることだけが精いっぱいで、毎年はいってくる新入部員のトレーニングをなおざりにして、ベテランだけが外国の山へ出かけるようなことはできないという事情があったのだ。

外国の山について、本を読んで研究し、地図を調べ、情報を集めて、戦略、戦術を論じ合うことは盛んだが、じっさいに学生だけで隊を編成して海外に送るという計画は、京都大学山岳部としてはとりあげないというのが、これまで部を支配していた考え方であった。

京都大学にはOBの組織として、学士山岳会（A・A・C・K）があって、一九五三年のネパ

ール・ヒマラヤのアンナプルナ以来、カラコラムやヒンズークシの山々へさかんに遠征隊を送りだして、成功を重ねている。

その勢いに圧倒されていた後輩学生たちの京大山岳部も、ここ数年の間に部員の数もふえて、実力をましてきた。そして国内では、黒部、剣、南アルプス、日高山脈などに、かなり意欲的な山行きを集中的におこなってきたので、そろそろ部の総力をあげて外国の山と取り組むべき時機が到来した、海外に遠征隊を出したいという機運が急速に高まってきたのである。

舞台としてはヒマラヤをえらびたい。南北のアメリカやアフリカ大陸にも高い山はある。赤道に近い島にも、氷河をいただく山があって、未登頂のものもあるらしいという。しかし、京大山岳部のはじめての海外遠征であれば、ヒマラヤを目指さなければ承知できにくい。

ヒマラヤといっても、西のインダス河から東のブラーマプトラ河まで、延長約二五〇〇キロを有する大山脈、そこには数えきれないほど山がある。高い山、むずかしい山、美しい山、接近に困難な山、いろいろあるが、われわれは最低限度つぎの三つの条件をみたす山をえらばなくてはならないと考えた。

一、処女峰であること。二、接近が比較的容易であること。三、五人くらいの小パーティの登頂が可能で、七〇〇〇メートル前後の高度を有すること、がそれである。

第一の条件は、説明の必要がないだろう。日本からわざわざ出かけてゆく以上、未登の山を

えらばなくては、京大伝統のパイオニーア・スピリットの看板が泣きだす。

第二の条件によって、政治的考慮から外国人の接近を禁止、または制限しているシッキムやガールワルの山々はおのずからふるいおとされる。また、接近の難易が、日数と費用に関係する。山のふもとに達するまでの距離が長かったり、道が悪かったりすれば、荷物の輸送や補給が困難となり、われわれのような金のない隊には好ましくない。ネパール・ヒマラヤは、今回は考慮しにくいのではないか。

第三の条件は、紀行や写真によって、あらかじめ登高計画を立てることができ、しかも登頂は至難という札つきではない山を要求するものである。そして、山岳部の活動を支障なくおこなう陣容を残したうえで、外地へ送りだせる人数の最大限は五、六人だから、それで登れる高さは、七〇〇〇メートル前後ということになるのである。

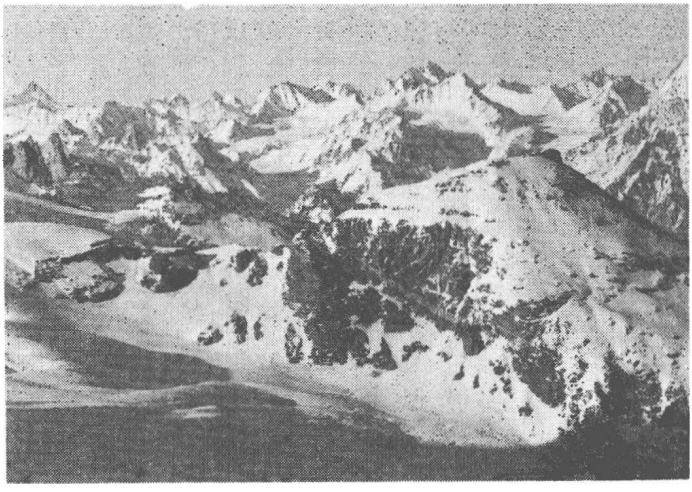
もちろん、ほかの隊が近づいたことのないような、未知の山群にはいって、探検をしたいという希望がないわけではないが、今回は未登峰の頂上に立つという、はっきりした目的をかかげているのだ。

以上の三条件のほかに、許可申請手続きや、時期、さらに費用の点などを考慮して総合的な判断をくだした結果、インドのパンジャブ州に属する、パンジャブ・ヒマラヤのピル・パンジャール山脈にある二つの無名峰、六五九四メートルと、六四一二メートルとがえらびだされた。

高度は 6000m から 6500m くらい

一九六二年の二月に、在日インド大使館を通じて、インド外務省に登山許可申請書を提出した。ところが、四月になって、インド政府は、この二峰の登山は許可できないと言ってきたのである。残念だが仕方がない。やむをえず、第二候補として考えていたインドラサン（六二二一メートル）とデオ・ティバ（六〇〇二メートル）の二峰に変更して、おりかえし二度目の許可申請をした。今度は、まちがいなく許可がおりるだろうという情報があったのである。

学生を主体にするという考えだったが、内外に対して責任をもつ隊長なしにはすまされない。これを小野寺幸之進教授にお願いした。そして海外遠征の経験者として、A・A・C・Kの酒井敏明が副隊長をつとめるこ



ビル・パンジャール山脈東端の山々，

とになった。隊の構成は次のとおりである。

隊長、小野寺幸之進。五一歳、京都大学農学部教授、農学博士。今では温厚篤実の教授としておさまりかえっておられるが、第三高等学校、京都大学旅行部時代いらいのベテランである。

副隊長、酒井敏明。二九歳、大学院博士課程、地理学専攻。一九六〇年のA・A・C・Kパミール高原学術調査隊に参加、ヒンズークシ山脈のノシャック峰（七四九〇メートル）に初登頂した。隊では荷物輸送の責任者となり、登攀隊の指揮を担当する予定。

隊員、大森義次。二二歳、文学部四回生、心理学専攻。色が白くて、一見おとなしそうだが、シンはいちばんしっかりしていて、つねに大所高所からものをみている。おかげで、

しりの重い隊長や副隊長も、何度か対外折衝のために東京へ追いたてられることになった。会計を担当する。

隊員、富田幸次郎。二二歳、工学部四回生、建築学専攻。感興を覚えると、なにか詩のようなものが口をついて出てくるらしい、ロマン派的傾向をもつ。いつでも数字のぎっしりつまった紙をもって計算ばかりしていたと思っているうちに、装備万端を短時日の間に調達した腕前は相当なもの。装備と設営を担当する。チョウチョウの採集を買って出る。

隊員、田中二郎。二一歳、理学部四回生、動物学専攻。オットリ型。遠征計画を立案時の山岳部のチーフ・リーダー。岩倉で生まれた純粋の京都っ子。医薬品、医療器械をとりあつかうドクターをひきうけさせられた。植物、昆虫の採集を分担。終了後、南部インドのマイソール州にある京大とマイソール大学合同の猿類研究所にゆきたいという。

隊員、宮木靖雅。二一歳、法学部四回生、国際法専攻。背が低いがよく働く。国内での準備期間中は、資料収集と英文の手紙づくりを担当。英会話の練習はだれよりも熱心で、英語にツヨイと期待されているので、カルカッタ税関では活躍してくれるだろう。写真係りを任命された。富田も岩瀬も写真天狗だから、現像がすむまでは優劣のほどはわからない。

隊員、岩瀬時郎。二一歳、経済学部三回生。三回生は一人きりなので、二〇名近い同級生部員の圧倒的な支持を得て張りきっている。食糧係りを担当する。準備の日数および費用の制限

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com